

特別支援学級における自立活動の指導に関する研究

特別支援教育室 蒲池 慎一 山内 望 川本 孝
越智 宣和 鶴井 宏治
研究協力者 愛媛大学教育学部准教授 苅田 知則

【要約】

新学習指導要領では、特別支援学級における特別の教育課程の編成に係る基本的な考え方として、自立活動を取り入れることが示された。そこで、昨年度は特別支援学級での自立活動の指導指針となる「特別支援学級における自立活動ガイドブック（案）」を作成した。本年度は、このガイドブック（案）を実際に活用した特別支援学級担任の意識調査及び実践事例を通して、その有用性を裏付けることができた。

【キーワード】 自立活動の指導 ガイドブック（案） 手順シート

1 研究の目的

近年、発達障がいを含めた障がいのある児童生徒が、特別支援学校だけでなく、小・中学校でも多く学んでいる。そして、小・中学校における特別支援学級等においては、児童生徒の多様な障がいの種類や状態に応じた指導の充実が求められている。

平成29年3月に告示された小学校学習指導要領・中学校学習指導要領では、特別支援学級における特別の教育課程の編成に係る基本的な考え方として、「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るため、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動を取り入れること」と新たに示された。

自立活動は、特別支援学校の教育課程において特別に設けられた指導領域であり、障がいによる、日常生活や学習場面で生じる様々な困難を改善・克服するための指導を行うものである。また、障がいのある児童生徒は、その障がいによって、各教科等において育まれる資質・能力を身に付ける上でつまずきを生じやすいため、自立活動における個別の指導計画を作成して、それに基づいて指導することが大切である。

しかし、特別支援学級における自立活動の指導に関する先行研究では、「指導内容が不明確である」「授業の組み立て方が分からない」といった課題が挙げられている。本センターの研修を受講した知的障がい特別支援学級担任や自閉症・情緒障がい特別支援学級担任等からも同じような声を聞くことがあり、本県でも同様の課題があると考えられる。

そこで、特別支援学級担任を対象とした自立活動の指導の手引となる資料を作成し、提供することで、県下の特別支援学級における自立活動の指導の充実が図られると考え、2か年の研究に取り組むことにした。本年度は、その2年次である。

2 研究の内容

(1) 1年次の取組（概要）

ア 自立活動の指導の手引の作成

特別支援学級担任が自立活動の指導を行う際の指針となるように、平成30年3月に出された『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編』や先行研究等を参考に、「特別支援学級における自立活動ガイドブック（案）」（以下「ガイドブック（案）」という。）を作成した。

主な内容は、特別支援学級担任が自立活動の目標や教育課程上の位置付け等を正しく理解するための「自立活動の概要」と、自立活動の指導計画の作成手順を八つにまとめた「自立活動の進め方」（表1）である。

表1 自立活動の進め方

①実態把握	⑤目標の設定
②実態把握の整理	⑥指導内容の選定
③課題の抽出	⑦指導内容の設定
④中心的な課題	⑧評価

また、「自立活動の進め方」に沿って記入することができる「自立活動の指導『手順シート』」（以下「手順シート」という。）（P47資料）と、記入する際の実態把握や指導内容の整理に参考となる「補助資料」を加えた。

イ 協力学校への意見聴取

協力学校として、特別支援学級が複数設置されている学校（小学校1校・中学校1校）を選定し、各特別支援学級担任に対して「ガイドブック（案）」の「自立活動の概要」と「自立活動の進め方」の内容について、意見聴取を行った。

意見聴取の結果、特別支援学級の自立活動の指導に役立つ内容であることが確認できた。一方で、レイアウトや文章表記の見直し、「補助資料」の活用方法等が課題として挙げられたため、意見聴取の結果と愛媛大学教育学部苅田知則准教授の助言を基に、「ガイドブック（案）」の内容の改善を図った。

(2) 2年次の取組

ア 意識調査による「ガイドブック（案）」の有用性の検証

改善した「ガイドブック（案）」が実際の指導で役立つものなのかを検証するために、特別支援学級担任の、「ガイドブック（案）」を活用する前（5月）と活用しながら自立活動の指導を行った後（9月）の自立活動の指導に対する意識を調査し、比較・検討を行った。調査対象者は、1年次と同様に、協力学校である小学校1校、中学校1校の特別支援学級担任で、小学校6名、中学校3名の合計9名とした。

(ア) 意識調査の内容及び回答方法

表2のように、自立活動の指導における、「①計画段階」「②指導段階」「③評価・改善段階」での意識を尋ねた。設問に対して4件法（「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「全く思わない」）で回答を求めた。

また、各設問で「とてもそう思う」「そう思う」と回答した教員（困難さを感じる教員）には、その理由を選択肢から選んでもらうようにした（複数回答可）。

(イ) 調査結果

「ガイドブック（案）」の活用前（5月）と活用後（9月）の、自立活動の指導に関する意識調査の回答結果を、表3、表4に示す。

(ウ) 考察

表3の回答結果を見ると、9月には、計画段階で「そう思う」と答えた人数が2名減少しているものの、指導段階及び評価・改善段階においては、ほとんど変化が見られなかった。この

表2 意識調査の内容

①計画段階	
「自立活動の指導計画を作成することは、難しいと思いますか？」	
〈理由〉	
ア	子どもの実態を把握することが難しい。
イ	自立活動の指導目標を設定することが難しい。
ウ	自立活動の指導内容を設定することが難しい。
エ	関係教職員と共通理解を図ることが難しい。
②指導段階	
「自立活動の指導を行うことは、難しいと思いますか？」	
〈理由〉	
オ	具体的な指導場面を設定することが難しい。
カ	自立活動の指導を各教科等に取り入れることが難しい。
キ	具体的な手立てを考えることが難しい。
ク	子ども自身に目標を意識させることが難しい。
ケ	関係教職員と共通理解を図ることが難しい。
③評価・改善段階	
「自立活動の評価及び見直しを行うことは、難しいと思いますか？」	
〈理由〉	
コ	客観的に評価することが難しい。
サ	指導内容や手立てについて評価することが難しい。
シ	子ども自身に自己評価させることが難しい。
ス	指導計画を見直すことが難しい。
セ	関係教職員と共通理解を図ることが難しい。

表3 設問①～③の回答結果 (人)

設問	とても そう思う		そう思う		あまり 思わない		全く 思わない	
	5月	9月	5月	9月	5月	9月	5月	9月
①計画段階	1	1	6	4	2	4	0	0
②指導段階	0	1	6	5	3	3	0	0
③評価・改善段階	0	1	5	4	4	4	0	0

表4 理由についての回答結果 (人)

段階	理由	5月	9月	変化(※)
①計画段階	ア	2	2	—
	イ	4	3	↓
	ウ	6	4	↓
	エ	2	2	—
②指導段階	オ	4	3	↓
	カ	2	1	↓
	キ	5	3	↓
	ク	2	4	↑
	ケ	2	2	—
③評価・改善段階	コ	1	1	—
	サ	4	1	↓
	シ	2	3	↑
	ス	1	3	↑
	セ	1	2	↑

※ 変化 ↑…増加 ↓…減少 —…変化なし
結果からは、「ガイドブック(案)」を活用することでの自立活動の指導における困難さの意識の変容は見られなかった。

しかし、困難さを感じる理由についての回答結果(複数回答可)を示した表4を見ると、計画段階・指導段階の9項目中5項目について回答人数が減少していることから、これらの段階での困難さはある程度軽減されていることが推察される。唯一増加した、理由ク「子ども自身に目標を意識させることが難しい」については、1学期の指導を通して、教員が明確な目標を持つことだけでなく、「子ども自身が自分の目標を意識しながら活動に取り組めるようにすること」も大切だということに気付いた表れと捉えることができる。

一方、評価・改善段階では、5項目中3項目(理由シ「子ども自身に自己評価させることが難しい」・理由ス「指導計画を見直すことが難しい」・理由セ「関係教職員と共通理解を図ることが難しい」)で、困難さを感じる教員が増加したことから、「ガイドブック(案)」が自立活動の指導の評価・改善を行うに当たって、有効なものではなかったと考えられる。しかし、理由サ「指導内容や手立てについて評価することが難しい」の内容の困難さを感じる人数が4人から1人へと明らかに減っていたことから、

「ガイドブック(案)」が、指導内容や手立てを評価する上では少なからず役に立ったのではないかと考える。

以上のことから、1学期の実践期間で特別支援学級担任の明確な意識の変容は見られなかったが、実際の指導において、一定程度「ガイドブック(案)」が役立つことが確認できた。なお評価・改善段階での課題(困難さが増した3項目の内容)については、現行の「ガイドブック(案)」の該当箇所、「子どもが自己評価できるため」「指導計画を見直すため」「関係教職員と共通理解を図るため」に手掛かりとなる具体例等を加えることとした。

イ 実践事例を通じた「ガイドブック(案)」の有用性の検証

「ガイドブック(案)」を基にした実践事例(特別支援学級担任の自立活動の取組や児童生徒の変容)を通じて、「ガイドブック(案)」の有用性を検証した。実践事例は、県下の先生方から、「知的障がい特別支援学級や自閉症・情緒障がい特別支援学級の自立活動の指導が特に難しい。」との声があるため、協力学校の小学校知的障がい特別支援学級1学級(学級担任:T1)と、中学校自閉症・情緒障がい特別支援学級1学級(学級担任:T2)の合計2学級で、事例対象者を一人ずつ決めて取り組んでもらうこととした。

T1及びT2は、「ガイドブック(案)」の「自立活動の進め方」に示された内容を参考に「手順シート」に記入しながら、自立活動の計画・指導・評価・改善を行った。また、本所員は、T1及びT2に適宜「ガイドブック(案)」に関する意見聴取を行ったり、指導方法等を共に検討したりした。

なお、各実践事例とも、計画段階、指導段階、評価・改善段階の流れに沿って、主な取組や事例対象者の変容の概要を述べることとした。また、意見聴取の主な内容については、段階ごとに「担任の声」として示すこととした。

(ア) 実践事例1: 小学校知的障がい特別支援学級に在籍するAさんへの取組 a 計画段階

T1が記入した「手順シート」に示された実態把握、中心的な課題、長期目標及び1学期の短期目標は、以下のとおりである。

【実態把握】（一部抜粋）

- ・毎日繰り返し行っている登校時の準備や帰りの支度等は、担任や支援員の少しの言葉掛けで、取り組むようになってきた。
- ・活動内容によっては、取り掛かるまでに時間が掛かったり、指示待ちになったりしていることがある。
- ・いろいろなことが気になり、集中が途切れやすいが、周囲の様子を見て行動することが増えた。

【中心的な課題】

視覚的な手掛かりを用いて見通しを持たせ、集中して学習や作業に取り組ませることで、自主的に行動する経験を積み重ねる。

【長期目標】

1 単位時間の活動の見通しを持ち、集中して学習や作業に取り組むことができる。

【1 学期の短期目標】

教師と一緒に、スケジュールを見て活動内容が分かり、15分間、学習や作業に取り組むことができる。

【計画段階での担任（T1）の声】

- Aさんの実態を自立活動の内容の6区分で整理することで、Aさんのできているときの状況やそのときの手立て等に着目できた。
- Aさんの指示待ちの行動は、活動への見通しが持てないことに起因するものであると考え、「中心的な課題」を設定した。
- 具体的な目標にするため、本人の集中できる時間を考慮して「15分間」という時間を設定した。

b 指導段階

T1は、目標を達成するために、指導内容に関する自立活動の区分や項目を選び出し、以下のような指導内容を設定した。

【指導内容】

- ①ホワイトボードに1 単位時間のスケジュールを示し（図1）、教師と一緒に活動内容を確認する。
- ②教師と一緒に、活動の終わりの状態を確認し、活動後「がんばりカード」（図2）を用いて振り返りを行う。
なお、具体的な指導方法として、指導内容

①については、15分間の活動を組み合わせて授業を構成し、授業の最初にAさんにホワイトボードを提示して、活動内容を確認した。そして、活動が終わるごとに、数字に丸を付けるようにした。「リフレッシュタイム」は、気分転換を兼ね、身体を動かす時間として、7月から取り入れた。

また、指導内容②については、課題学習「じぶんべんきょう」（個別学習）に取り組む際に、色の違うかごを二つ準備しておき、一つのかご（緑色）に課題を、もう一つのかご（白色）はやり終えた課題を置くようにした。T1は、活動前に「緑色のかごの中の課題がなくなるまで」とAさんと確認するようにした。活動後「がんばりカード」を用いて自己評価を行った。

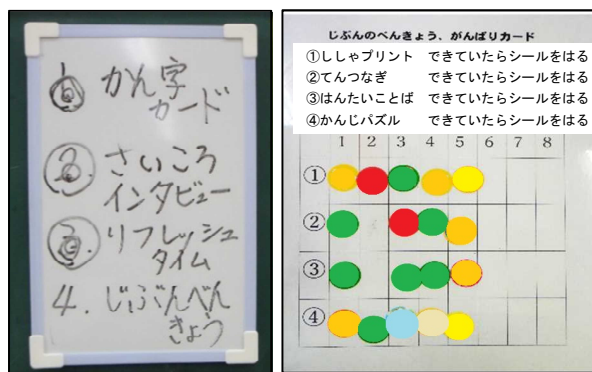


図1 スケジュール 図2 がんばりカード

【指導段階での担任（T1）の声】

- Aさんが自ら学習活動に取り組み、自己評価しながら学習活動への意欲を高めてほしいと考え、指導内容②を設定した。
- 学校生活全般にわたって、設定した目標や指導内容を意識しながら、Aさんに働き掛けることができた。

c 評価・改善段階

Aさんの変容や第2 学期の短期目標等について述べる。

(a) Aさんの変容

6月中旬には、ホワイトボードに書いたスケジュールをよく見るようになり、次の活動のことをT1に自ら伝えてくるなど、1 単位時間の活動の流れを理解できている姿が確認できた。「じぶんべんきょう」では、かごを用いた課題のやり方についてはすぐに理解でき、何度か取り組んだことのある学習であれば、15分間程度一人で取り組めるようになり、シールを貼るこ

とを楽しみにする様子も見られた。また、年度当初は、下級生が廊下を通ったときなどに離席が目立っていたが、1学期終わりには、離席することなく最後まで取り組むことができるようになった。

その一方で、自信を持ちにくい活動内容の場合には、不安げな様子でT1の指示を待つ姿が見られた。

(b) 2学期に向けて

1学期末のAさんの姿から、2学期の短期目標及び指導内容を次のように設定した。

【2学期の短期目標】

教師と一緒に「じぶんべんきょう」の活動内容を選び、15分間、集中して学習や作業に取り組むことができる。

【指導内容】

- ①「じぶんべんきょう」の活動内容を、Aさんが選択できるようにする。
- ②各活動の終わりの時刻を時計で示したり、タイマーを活用したりする。
- ③「がんばりカード」を用いての自己評価を継続する。

【評価・改善段階での担任(T1)の声】

- 「15分間」という具体的な数値で目標を設定していたので、明確に評価できた。
- 「がんばりカード」を用いて自己評価を行うことで、活動に対する意欲が高まった。「じぶんべんきょう」以外の活動でも、シールを貼ることを楽しみに頑張る様子が見られるようになった。
- Aさんにとって、自信を持って様々な学習活動に取り組むことが大切だと考え、短期目標を設定した。

(イ) 実践事例2：中学校自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍するBさんへの取組

a 計画段階

T2が記入した「手順シート」に示された実態把握、中心的な課題、長期目標及び1学期の短期目標は、以下のとおりである。

【実態把握】(一部抜粋)

- ・身の回りのことがしっかりでき、基礎的な学習についても理解している。
- ・集団の中で活動することは苦手で、自分の力を発揮することが難しい。

【中心的な課題】

様々な活動の中で自己肯定感を高めるとともに、自分の不安な気持ちを他者に伝えられるようにすることで、安心して集団の中で自分の力を発揮できるようにする。

【長期目標】

- ・友達と一緒に活動に取り組むことができる。
- ・教師に不安な気持ちを言葉で伝え、相談できる。

【1学期の短期目標】

T2の言葉掛けにより、不安なことを言葉で伝えることができる。

【計画段階での担任(T2)の声】

- 自立活動の内容の6区分で実態を整理し関連性を考えることで、Bさんの集団参加の難しさの原因は、活動や人への強い不安感によるものであることが推察された。
- 目標を設定する際は、子ども自身がその目標を聞いて、自分が何をするのかイメージできるということを心掛けた。

b 指導段階

T2は、目標を達成するために、指導内容に関する自立活動の区分や項目を選び出し、以下のような指導内容を設定し、指導に当たった。

【指導内容】

- ①1日の始まりに、不安な気持ちを数値化することで自分の気持ちを明確にして、何が不安かT2に伝えることができるようにする。
- ②T2を含めた教職員は、Bさんの不安な気持ちを十分に聞いたり、解決方法を一緒に考えたりすることで、Bさんの不安が軽減できるようにする。

具体的な指導方法としては、毎朝、Bさんの机の上に家庭配付用週時間割を多少変更した「マイ気持ちメーター」(図3)を置いておき、Bさんが登校後、その日の時間割を見ることで、1日の学校生活に見通しを持つとともに、学習時間ごとの自分の気持ちを「1(心配)～5(がんばれる)」と数値化して、記入するようにした。Bさんが記入後、T2に持ってきた際は、指導内容②に示した対応を心掛け、不安が軽減できる経験を重ねられるようにした。

4	11・13組	教訓			22
5	事前決定 の行状	5			報告式 表彰伝達
6	作 業 指導 ガイダンス	11・13組	5		
5					情報処理部
16:00	16:00	12:00	12:00	16:00	
5 4 3 2 1 がんばれる 心配					

図3 マイ気持ちメーター

【指導段階での担任（T2）の声】

- 設定した目標は、Bさんにとって苦手な面であるため、「伝える」きっかけとなるものが必要であると考えた。Bさんは、自分の気持ちの状態・程度を数値化することができると思われた。
- 指導内容を決める際には、関係教職員と共通理解を図るため、できるだけ具体的な表記を心掛けた。

c 評価・改善段階

Bさんの変容や第2学期の短期目標等について述べる。

(a) Bさんの変容

初めは、T2から促されて自分の気持ちを数値化していたが、ある日T2が声を掛けるのを忘れていて、自分で「マイ気持ちメーター」に数字を書いて見せにきた。その日以降、T2はBさんが自発的に持ってくるのを待つようにすると、Bさんは毎日、「マイ気持ちメーター」を忘れず記入し持ってきて、何が不安かを具体的にT2に話すことが増えてきた。

ある日、「-10」と書いてくることがあり、T2が驚いて「これは」と尋ねると、「これは絶対無理」と話すこともあった。そのようなときにでも、T2は、常に共感的な態度と発言を心掛けることで、Bさんは1学期途中から自ら不安な気持ちを伝えられるようになってきた。

また、初めは参加が難しいと思っていた授業にも、T2とのやりとりを通じて、参加できたこともあった。自分が得意な活動（ペーパークラフト等）では、苦手意識のあった友達がそばにいても一緒に活動できるようになった。

(b) 2学期に向けて

1学期末のBさんの姿から、第2学期の短期

目標及び指導内容を次のように設定した。

【短期目標】

教科担任に不安なことを伝えることができる。

【指導内容】

「マイ気持ちメーター」を使って、教科担任に不安な気持ちを伝え、相談できるようにする。

【評価・改善段階での担任（T2）の声】

- 具体的な目標及び指導内容を設定できていたので、評価しやすかった。
- 予想以上に良い変容が見られた。学級全体で取り組んでいる「がんばったビー」（※）の取組も効果的であった。
- 1学期の指導を基に、2学期も取り組んでいきたい。「教科担任に不安なことを伝える」際にも、1学期に使った「マイ気持ちメーター」を活用したい。
- 自立活動におけるPDCAサイクルの方法が、ガイドブック（案）を見ながら実践することで理解できた。

※ 学級の生徒一人一人が「がんばったビー」（ペットボトル1本）を持っており、1日の終わりに頑張ったことの数（主に参加できた授業数）のビー玉をペットボトルに入れ、全員が満杯になれば学級で楽しい活動ができることにしている（図4）。



図4 がんばったビー

(ウ) 考察

「ガイドブック（案）」の有用性について、T1及びT2からの意見聴取の内容及び事例対象者の変容といった二つの視点から考察する。

T1及びT2の各段階での意見聴取からは、まず計画段階において実態を6区分で整理することや、導き出した課題の関連性を検討した上で中心的な課題を導き出すことへの意義がそれ

それぞれで述べられていた。指導段階では、目標及び指導内容を設定するには具体的記述になるように心掛けたこと、そして評価段階では、具体的な目標設定を心掛けたことで評価しやすかったことが共通して述べられていた。これらの意見聴取の内容は、T1及びT2が「ガイドブック（案）」を活用できていたということ、そして活用することで自立活動の指導について理解を深め、自分の考えを整理しながら実践できたことを示している。

次に、事例対象者の変容に関することについて述べる。Aさんの短期目標「教師と一緒に、スケジュールを見て活動内容が分かり、15分間、学習や作業に取り組むことができる」及びBさんの短期目標「T2の言葉掛けにより、不安なことを言葉で伝えることができる」は、それぞれ達成することができた。Aさんについては、1単位時間の見通しを明確に持たせるようにしたことや、一つの学習活動を15分間として内容を構成したことが有効であった。また、Bさんについては、不安な気持ちをT2に伝えるきっかけとなる「マイ気持ちメーター」の活用が有効であったと考える。このことは、ガイドブック（案）を活用しながら手順シートに沿って考えを記入していくことで、適切な短期目標や指導内容等が設定できたということを示している。

以上、T1及びT2の意見聴取内容並びに事例対象者の変容から、昨年度末に改善した「ガイドブック（案）」は、特別支援学級担任が自立活動の指導を行う際に十分に役立つものであると言える。

3 まとめと今後の課題

本年度の研究は、昨年度末に改善した「ガイドブック（案）」の有用性について、協力学校の特別支援学級担任の意識調査や実践事例を通して検証した。特別支援学級担任の意識調査からは、「ガイドブック（案）」活用前後の明確な意識の変容は確認できなかったものの、実践事例では事例対象者2名ともよりよい変容が確認でき、「ガイドブック（案）」の有用性を裏付けることができた。

今後は、協力学校の特別支援学級担任の意識調査で明らかとなった「ガイドブック（案）」の改善が必要な箇所に修正を加えた後、本センターホームページに掲載し、各学校がダウンロ

ードして活用できるようにする。また、来年度以降、本センターで実施する研修講座の中でも取り上げながら、県下の特別支援学級における自立活動の指導の充実に向けた支援を継続して行っていきたい。

主な参考文献

- 文部科学省 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編』 2018
- 文部科学省 『小学校学習指導要領』 2018
- 文部科学省 『中学校学習指導要領』 2018
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 「特別支援学校及び特別支援学級における教育課程の編成と実施に関する研究」 2014
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 「今後の特別支援教育の進展に資する特別支援学校及び特別支援学級における教育課程に関する実際的研究」 2016
- 岡山県総合教育センター『自立活動ハンドブックー知的障害のある児童生徒の指導のためにー』 2015
- 山梨県総合教育センター『自閉症・情緒障害特別支援学級を中心とした自立活動の指導ガイドブック』 2014

自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年		氏名	
----	--	----	--

①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人、保護者の願い

②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

③課題の抽出

--

④中心的な課題

--

⑤目標の設定

長期目標		
短期目標	1	
	2	
	3	

※ 数字は学期を示す

⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

⑦指導内容の設定

	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1		
2		
3		

※ 数字は学期を示す

⑧評価

長期目標		
短期目標	1	
	2	
	3	

※ 数字は学期を示す